白髪赤眼の怪人

風瑚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
白髪赤眼の怪人

【Ｎコード】
Ｎ８５７３Ｖ

【作者名】
風瑚

【あらすじ】
神塚秋兎が思わぬ場所で出会ったのは、才色兼備・完全無欠の女子高生――――舞原彩音。彼女には誰にも言えない秘密があった――――。

物質支配する少女　？

舞原彩音。

彼女の名を知らぬ者はこの学校内ではただの一人だっていないだろう。

頭は相当良いらしく、学年トップクラス。

試験の後に張り出される成績表では常に5本の指に入っている。それも全教科まんべんなくだというのだから、万年赤点ぎりぎりの僕と比べたらもう、住む世界、どころか、次元すら違うだろう頭の良さである。

それに、運動神経もかなり良い。

たしか、あれは去年の体育祭だった。舞原彩音がリレーのアンカーだったのだが、前の生徒が転倒してしまい、最下位からのスタートとなった。普通はもう、誰がどう見たって無理だと思う、そんな破滅的な状況である。しかし、彼女は違った。これくらいピンチでもなんともないかのように涼しげな表情であっという間に5人抜きを果たし、見事、優勝してしまった。

抜かれた5人の中には陸上部に所属していた女生徒がいたらしく、その女生徒は、あまりにショックだったのだろう。次の日、退部届を出したらしい。運動部所属の先輩達が「舞原彩音を我が部活に！！」と、体育祭が終わった後のしばらくの間、彼女の教室の入り口前では舞原彩音争奪戦でかなり賑やかだったりもした。

しかし、どうやら、彼女はどの部活にも入らなかったようだ。

2年に上がって、彼女と同じクラスになってから知ったことだが、彼女は決まって、休み時間は一人で読書をしていた。

教室の片隅で静かに、本を読むのだ。

その姿はなんというか、これは本人に言っていいことなのかどうかわからないが、とても様になっていた。

話しかけれない――――のではなく――――話しかけてはいけない。

遠目に見ているだけで満足してしまうような、そんな不思議な魅力があった。

別に彼女が孤立しているわけではない。ときには、数名の女子と他愛ない会話に花を咲かせて、笑いあっていることもある。だが、やはり、彼女は一人でいるほうが多かったし、自ら、進んで一人でいることを望んでいる節がある気がした。それは悪いことではないと思う。彼女以外にもこのクラスには誰とも話さず、一日を終える生徒は何人かいる。そうして、そのまま、卒業する人だっているだろう。それを望んでしているのであれば、そんな高校生活もまた、アリなんだと思う。

だが、しかし、一人でいることを望むにしては、舞原彩音は目立ち過ぎた。

彼女がどこで何をしていた。お昼に何を食べた。町のどこどこでどういうお店に入った。等々・・・・・・。　どうでもいいし、どうにも役に立ちそうにない情報ですら校内に飛び交うほどに、高校入学してからこの一年間で彼女はとんでもない有名人となってしまっていた。まったく、一女子生徒の私生活をあーだこーだと話すだなんて、みんなどんだけ暇なんだと思ったりもするが、そんな話をしっかり聞いている僕もまた暇なのだった。

それにしても。

それだけ色々な舞原彩音情報を聞けば聞くほど、不思議に思うのは、彼女の噂話にはひとつも色恋話がない。ということだった。決して、彼女の見た目が悪いわけではない。どちらかと言えば、美人にカテゴリされる容姿である。舞原彩音を自分の彼女にしたいと画策している男はそれなりにいそうなものだ。

そんな中で、ひとつくらい恋話が出てもおかしくないんじゃないかと思う。しかし、一向にそんな浮いた話は上がってこない。何故か？　と言えば、まぁ、ただ単に彼女のおめがねに適う相手が未だ現れていないというだけなのかもしれないが。しかし、それだけではなく、いや、それ以上にこれは彼女の性格に起因するとこが大き

いようだ。
男嫌い。それも極度の。
それに加え、彼女はその身体能力の高さを余すことなく活用して、護身の為にと格闘技を身に着けていたのもその原因に拍車をかけていた。
それが身体目当てだろうと、淡い恋心を抱いていようと、そんなものは一切関係なく、相手が男ならば、容赦ない。平等に、公平に、時には言葉で、時には拳で、気安く近づくものなら、たちまちのうちに彼女は打ちのめし、打ち負かし、打ち滅ぼしていった。しまいには彼女の睨みひとつで失神した男もいたとか、いなかったとか。さすがに最後のは信憑性に欠けるが・・・・・。
つまり、そういう経緯があり、今現在、彼女を口説こうとする男子高校生はこの校内にはいなくなったのだ。
触らぬ神に祟り無し――――と、言いますし。
《清爛高校の美しき狂犬》なんて、男子の間で呼ばれているのを彼女ははたして知っているのだろうか・・・・・。

さて、ここまで長々と、舞原彩音がどういう人物なのか、僕なりにわかる範囲で語ってみたわけだが、ひとりの女の子について、延々語るというのはなんとも馬鹿らしい。しかし、これはあくまで自分の中での彼女に対する見解がどういうものだったのかの確認作業であり、どこかで間違いがあったのではないかという見直し作業だったわけで本当に申し訳ないと思うのだが、そこは看過してもらいたい。
しかし、だ。
こうして、再度、確認してみて、見直し作業をしてみたものの、やはり、というか、まさに、目の前で起こっている現状は常軌を逸脱しているのだった。
ここは町外れの廃墟となった４階建てのビルである。僕がこの町

に来たときにはもう、廃墟となっていた筋金入りの廃ビルである。
ところどころ外壁は崩れかけており、いつ倒壊してもおかしくないような、そんな危ない雰囲気を放っていた。
その中の、3階の一室。外から差し込む夕明かりによって、朱色に染まった室内で、彼女――――舞原彩音は静かに佇んでいた。
彼女の腰まで伸びた長い黒髪が、まるで水の上を漂っているかのように空中をゆらりゆらりと波打っていた。彼女の周りには大小、様々なコンクリート片やガラス片、金属類などの瓦礫が重力に逆らって、円を描くように舞っていた。
その光景は、廃ビルと少女という不似合いで不釣合いな組み合わせと相まって、とても異質だ。
目の前の光景を、僕は何度も何度も頭で整理し、理解しようとして、挫折してしまう。
今、何が起こっている。
彼女は、何をしている。
わからない――――。わからない――――。
これでは脳が理解するなと拒絶しているみたいだ。
でも、それでも。ただ一つだけ、僕にもわかることがあった。
それは、彼女が、彼女の瞳が、とても儚げで寂しげで今にも消えてしまいそうな、そんな表情をしているということだ。
それは昔よく見た、鏡越しによく見た、忘れることのできない顔にとても似ていた。
「舞原！！」
叫んでいた。叫ばずにはいられなかった。これ以上、黙って、彼女を見ていることが出来なかったんだと思う。
しかし、そんな僕の心情とは裏腹に、彼女が僕に向けたのは、敵意だった。
甲高い何かが割れる音が背後の壁に鳴り響いた。遅れてやってきた鈍い痛み。顔をしかめ、左頬に手をやると、――――ぬるり。切れた皮膚から血が溢れ出てくるのを感じた。

「・・・・・・神塚くん」
彼女が、僕の名前を口にする。その声は、静かで、平坦。
「神塚、・・・・・・秋兎くん」
一歩、彼女が僕に向かって、歩き出す。と、同時。今度は僕の右腕から血が噴き出す。
ガラス片だ。
彼女の周りを飛び交っている割れたガラスの欠片が1枚、一つの刃物のように尖った先端をこちらに向けて、飛び出したんだ。しかし、避けることが出来なかった。見えたと思ったときにはもう、僕の右腕は血だらけだった。彼女が向けるのは、敵意。この現象は全て、彼女が起こしているのだとようやく、ここで理解する。
・・・・・・やばい。やば過ぎる！
この女は危険だ。と、身体中が訴えてくる。
なにが、儚げで寂しげだ。
声をかけて、いったい、何をするつもりだったんだ、僕はっ。
彼女は男嫌いで有名な《清爛高校の美しき狂犬》だぞ！
そもそも、なんでったって、こんな廃ビルなんかに来ているんだっ！？
「ねぇ、神塚くん。君はなんでここにいるのかな」
「あー、本当になんでここにいるのかな！！」
音がしたから、見に来た。それだけ。
野次馬根性、万歳っ。
ふぅ・・・・・・。と、舞原は息を吐いた。
「まさか、クラスメイトに見られちゃうなんてね。ここなら、誰も来ないと思ってたのに、考えが甘かったみたい。これは非常に困った事態だわ。ねぇ・・・・・・、ねぇ、神塚くん。わたしはいったい、どうすればいいのかな」
見られたってのは、さっきから舞原の周りでふわふわ浮いている瓦礫たちのことだろうか。きっと、そうだろう。
「それなら、俺が黙っていれば、いいだろ」

「黙っていてくれるの？」
舞原が小首を傾げて、再度、問いかける。
「そりゃ、もちろんさ！　誰にだって、秘密の一つや二つ、あるもんだっ。僕だって、誰にも言えない秘密、あるしな」
それが、どれだけとんでもない秘密だとしても――――。
秘密は、守らなければならない。
「そうね」
彼女はそう言って、俯いてしまった。
「けど、確実ではないわ」
「そうか？　これでも僕は口が堅いことで有名なんだがな」
「それは初耳。信憑性に欠けるわね」
「そうか。残念だ」
「ほんと、残念ね。だから、やはり、今回も、いつもの手でいくわ」
俯いていた顔が徐々に上がっていく。
「へぇ・・・。いつもの手ね。どんな方法なのか、教えてくれたりするのか？」
「知りたい？」
真正面から僕を見据えると、一度、長い長い瞬きをする。
「そりゃ、・・・・・・自分に関わることだからな」
「そぉ・・・・・、教えてあげる」
舞原の目がすぅーっと、細くなった。
「どおおおおおおおおおおおおおおおおおおっっっ！！！！」
僕は駆け出した。もう、腕の一本くらい犠牲にする覚悟で。その行動は吉と出た。すぐ後ろで爆撃音が響く。足は止めずに後ろを見れば、さっきまで僕がいた辺りの壁やら床やらがガラガラガラ・・・・・・と、崩れていくところだった。
「ふざけんな、舞原ってめえ！僕を殺す気か！？」
「馬鹿言わないで。わたしが殺人なんて愚かな行為をするもんですか」
もうもうと、立ち込める煙の中から、舞原の静かで、だが、よく

通る声が聞こえてくる。
「虫の息程度で止める予定よ」
「それはもう、９９％殺されてますよね！？」
僕が叫び返したところで、煙が晴れて、舞原の姿が視認できるようになった。
床が崩れたから、もう、追ってこれやしないと思ったんだが。
どうやら、彼女の能力で浮かべた瓦礫で足場を作って渡ってきてるようだった。飛ばすだけでなく、そういう使い方もアリらしい。
彼女は瓦礫を完璧にコントロールしていた。彼女の思いのまま、自由自在である。
なんて、便利な力だ。
くそっ、振り返ってる場合じゃない！
僕は足に力を込めて、走る速度を上げた。
あと、もう少しで、階段だ――――！！
「甘いわね」
舞原の言葉と同時に、ガトリングガン。数十もの瓦礫が僕を追い越し、飛んでいく。そして、階段まであと一歩というところで、真上の天井を瓦礫が貫いていき、ガラガラガラ・・・・・と崩れていった。　やられた。このビルの階段は、ここしかないというのに・・・・・。
唯一の脱出路である階段は瓦礫の山に埋もれてしまった。
どうする？
他に、逃げ道なんて・・・・・・、
「さあ、観念しなさいな。あなたには今日のことを忘れたということすら、忘れさせてあげる」
それは、死ぬよりも恐ろしい体験をするという意味だ。
僕はよろめくように、壁に手を付こうとして、空を切った。見るとそこには壁は無く、ぽっかりと長方形の空間が開いていた。いや、正確にはそこは、元々は窓が嵌め込まれていたのだろう。今は窓が外されていて、まるで、一枚の絵画のように外の景色を切り取って

いる。
「いけるか・・・・・・」
ぽつり・・・・・・と、呟いた僕の言葉に、どうやら、彼女も僕の意図に気づいたようだ。
「やめときなさい。そこから、飛び降りたら、死ぬわよ」
たしかに。普通の人間なら、死ぬかもしれない。頭から落ちれば確実だ。うまく体勢を取れても、病院送りは免れないだろう。
「僕の心配をしてくれるんだ？　なんだかんだで優しいんだな、舞原」
「本当のことを言っただけよ」
舞原はあくまで冷たい口調だった。
だから、あえて僕は気楽な調子で言ってみた。
「また、明日っ」
躊躇なく、3階の窓から身を投げた。
身体が、地面に向けて、落ちていく。
ぐんぐんと、落下速度は上がっていき、地面が近づいてくる。
悠長に構えてなどいられない。頭から落ちれば確実に死ぬ。うまく体勢を取れても、病院送りは免れない。だが、それはやはり、普通の人間だとそうだという話でしかない。なら、僕は大丈夫だ。これくらいの高さ、僕なら大丈夫だ。

――――僕は、人であって、人ではない。

ドクンっと、僕の身体を駆け巡る血液が一斉に、大きく脈打った。
それと同時。身体に変化が起き始める。
黒髪は銀色がかった白髪へ、黒眼は血のように真っ赤な赤眼へ。
切り替わったところで、地面に着地した。
全ての衝撃が両足に伝わってくる。
その全ての衝撃を吸収して、跳んだ！！
斜め上へとロケットのごとく、天高く舞い上がった僕の身体は2

階建てのアパートの屋上へ着地すると、勢いを殺さないまま、もう一度、大きく弧を描いて跳躍した。

これが僕。僕は、化け物。

この町の住人ならば、誰もが知っている都市伝説《白髪赤眼の怪人》。

神塚秋兎のもう一つの名前であり、これこそが僕の、誰にも言えない秘密だった。

物質支配する少女　？

「いってええええええええええええええええええええええ！！！！」

部屋中に響き渡るほどの悲鳴があがった。恥ずかしながら、それは僕の悲鳴である。

今いる場所は、六階建てのマンションの一室。

夜帰って、ご飯を食べて、お風呂入って、寝て、朝起きるための場所。つまり、僕の住家だ。正確に言うと、僕は居候の身だった。実際の所有者は今、隣に座って消毒液にたっぷり浸した綿で僕の左頬に出来た切り傷を消毒してくれている、見た目二十代（実年齢を教えてくれない）の女性、佐伯智代だ。

二年前のある日、この世の全てを羨望し、この世の全てに絶望して、ただ一人、死に場所を求め、町を彷徨い歩いていた頃、僕は彼女と出会った。佐伯智代は僕がどういう存在の者なのか、よく理解していた。理解した上で彼女は僕を家に招きいれ、住む部屋を与えた。衣食住だけでなく、高校にも通わせた。まるで、普通の人間の子のように彼女は接してくれたのだ。最初は困惑し、警戒していた僕だったが、彼女の屈託ない態度に触れることでわだかまりは解け、素直に感謝するようになった。そのかわり、というわけではないのだが、僕は彼女の仕事を手伝うことにした。

佐伯智代の仕事はなんだか変わっていた。

「この世界に起こった不可解な出来事、奇妙な現象、奇怪な事件を調査・解明すること。

それが私の仕事よ」

彼女はそう、胸を張って言っていた。

そうして、調査した内容を本に纏めて出版し、生活費を稼いでいるのだ。

彼女の本はなかなか好評のようで、出す本、出す本、ベストセラ

ーらしい。そんなにおもしろいものなのかと、一度読んでみたのだが、初めの三行で断念した。僕は活字が苦手なのだ。
付けっぱなしのテレビでは、夜のニュースがやっていた。
眼鏡とスーツでキッチリと固めた男性アナウンサーが硬い表情で原稿を読んでいる。その内容は最近、このあたりを騒がしている殺人事件のようで、被害にあった中学二年生の女の子の写真が大きく、画面に映し出されていた。
「ねぇ、智代さん。これって、最近この町で起きてる事件ですよね」
とくに気になったわけではないが、智代さんに話を振ってみる。黙ったままだとちょっと、居心地の悪い距離なのだ。距離ってのは智代さんとの距離。近いんだよ。男子高校生は年上のお姉さんには弱いのだ。
「そうよ」
男子高校生の心の葛藤に気付いているのか、いないのか。智代さんは僕のほっぺたにガーゼを当てながら、答えた。
「今日で被害者は三人になったわね」
「また、ですか」
「えぇ。被害にあった子はみな、中学生の可愛らしい女の子・・・・・・。犯人は異様なまでに中学生女子にご執心のようよ。はい。次は右腕ね」
言うや否や、右腕の傷口に消毒を始める。
「いったい！！智代さん、痛いって！！」
この消毒液、かなり染みるんだよ。
「はいはい。痛いってことは生きてるってことよぉ。ほら、動かない！」
「いぎゃあああああああああああああああああああ！！！！！」
部屋中に響く涙交じりの叫び声。恥ずかしながら、また、僕である。
「まったく。仕事でもないのに血塗れで帰ってきてんじゃないわよ」
「あぁ～、ははっ。・・・・・・ごめんなさい。ちょっと、割れた

窓ガラスで引っかいちゃって」
嘘は、ついてない。
「ふーん。割れたガラスで、ねぇ。はいっ、終わったわよ」
「あぁ、ありがとう」
僕の治療を終えた智代さんは救急箱を片付けに部屋を後にする。
テレビニュースはさきほどの痛々しい事件から一転、動物園のパンダが出産の見出しに変わっていた。
「さぁ～って！！」
大量の缶ビールが現れた。
「そして、喋った！？」
「えっ？　なになに？？」
智代さんだった。両手いっぱいにビールを抱えて、前もろくに見えてなさそうだ。
僕が座っているソファとは向かいにあるもう一つのソファに座ると、持ってきた缶ビールをまずは一缶、一気に飲み干した。次いで、もう一缶、満面の笑みで美味しそうに飲み始める。
智代さんは、かなりの、のんべえさんだ。
まぁ、いつものことではあるんだけど・・・・・・。
「それ、全部飲む気なんですか」
「えっへっへ～」
智代さんは僕の非難めいた言葉を笑って、ごまかす。まったく、聞く耳を持たない。と、その笑顔はすぐさま、真剣な表情へと変わった。
「それで？　いったい、何があったの」
聞かれた。さっきのではごまかせてなかったようで。
真剣な眼差しが僕の両眼を見ている。
「・・・・・・・・・・えぇっと、まいったな」
どこまで話したものか。少し、悩む。けど、智代さんには隠せないか。
「話しますよ。でもその前に、なにか、おつまみ作りましょうか」

炊事は僕の担当だった。ちなみに智代さんは料理はできない。
「はいっ！お願いします！！」
智代さんの瞳がひときわ大きく輝いた。

軽く何品か、おつまみを用意して、リビングへと戻る。
智代さんは嬉々とした表情でそれらを一口、二口と食べる。
「んーーー！おいしいっ！！やっぱ、秋兎の作るおつまみはサイッコーだわ！私の好みをよくわかってる♪」
んーーー！と、また、喜びの声を上げて、子供のように笑った。
そんな、彼女の嬉しそうな顔を見て、僕も微笑む。
作りがいがあるってもんだ。
「喜んでもらえてよかったです」
そうして、他愛ない会話を少ししてから、本題の話へと移った。
町外れの廃ビルであった不思議で異質な出来事を。ただ、舞原彩音の名前は伏せておいた。
智代さんはふんふんと頷くばかりで目線はつまみとお酒に夢中のようだった。けど、構わず、僕は話し続ける。これもいつものことだ。聞いてないようでいて、しっかりと聞いているのが智代さん。
「逃げ道がもう、あの窓からしかなくて、力を使うしかなかったんですよねぇ。きっと、見られただろうなぁ・・・・・・」
最後のほうは、もう、独り言になっていた。
話は終わり。これ以上、話すことはない。僕が黙ったのを見定めて、智代さんは箸を止めた。「ふむ」と、頷く。
「テレキネシス」
彼女はそう言った。
「テレキネシス？」
「そお、テレキネシス。遠くのものを動かすという意味よ。もっと大きな区分で言うとサイコキネシスね。日本語で言えば、念動または念力、まとめて念動力と言われている力のことよ。物理的エネルギーや道具を使わずに対象物に影響を与える能力のことで、その中

でも手を触れずに物を思うがままに動かしたというのであれば、それはテレキネシスで間違いないわ」
「あー・・・・・・、テレビとかで遠くに置いた物を手元に引き寄せたり、離れた人を念じただけで床に倒したりしてるのを見たことあるけど。そういうのですか？」
「まぁ、そうね。超能力の中では、もっともポピュラーな力の一つだわ」
　でも。と、彼女は続ける。
「秋兎の話が本当だとすれば、その娘。とんでもない力の持ち主よ。さながら、物質支配者とでも言うのかしら」
　ちょっと、大仰かしらね。と、智代さんは笑って、また、晩酌の続きを始めた。
「ふむ・・・・・・」
　物質支配者、ねぇ。
「ん？どうしたの」
「いや、明日のことを考えると憂鬱というか、どうしたものかな、と」
　僕の言葉に智代さんは訝しげに眉根を寄せた。
「そんなの、やっつけちゃえばいいじゃない」
　何を言ってんだという表情だった。
　僕としては、彼女こそ、何を言ってんだって感じだ。
「そんなことできるわけないじゃないですか」
「できるわよ。そもそも、今日だって、なんで逃げてきたのよ。いくら相手がかなりの力を保持した念力者だとしたって、あなたが本気を出せば、ちょちょいでしょ」
「ちょちょいって、そんな簡単に・・・・・・」
「簡単なのよ！　なんてったって、あなたはこの町の生きる都市伝説《白髪赤眼の怪人》なんだから！！」
　智代さんはどこか誇らしげにそう、言い放った。
《白髪赤眼の怪人》。

それはこの町に住む者なら、知らない者はいないほど有名な都市伝説の名前。そして、僕のもう一つの名前。舞原彩音から逃げる際に見せた、あの姿のことだ。

普段は黒髪黒眼。身長も平均並、体重も平均並、身体能力も平均並、勉強はちょっと苦手な、ごく普通の高校生。だが、僕の中に眠っている特異な力を解放すると、黒髪は白髪へ、黒眼は赤眼へと変貌する。　そうなることで、爆発的な身体能力を得ることが出来た。

3階から飛び降りて、地面に着地した後、2階建てアパートの屋上に飛び移る、なんて芸当が出来たのもそのためだ。

僕の中に眠る特異な力。それはどうやら、怪異の力、妖怪と呼ばれる日本で古くから言い伝えられている不可思議な存在の力らしい。

「神塚家は、その筋では結構有名でね。ごく稀に、怪異の血を色濃く、受け継いで生まれる子がいるの」

2年前に語ってくれた智代さんの言葉を思い出す。

「本来、怪異の力を宿して生まれた子は、人知れず、殺してしまうのが神塚家のしきたり。だけどね、あなたのお父さんとお母さんはそれが出来なかった。あなたの力を知ったご両親はあなたを失うことを恐れた。けど、このまま一緒に過ごすことは出来ない。あなたの力のことを他の親族に知られたら、あなたは確実に殺されてしまうもの・・・・・・。だから、まだ幼かったあなたを手放すしかなかったの。あなたは愛されてなかったから捨てられたんじゃない。愛されていたから捨てられたのよ」

そう、智代さんは僕に言ってくれた。

僕の知りたかった過去を教えてくれた。

それが真実なのかはわからない。けど、智代さんのことは信じてもいいと思えた。

2年前のあの日、僕は智代さんに救われたんだと思う。

・・・・・・・・けど、あいつは。

「できません。男嫌いで、相手が男なら容赦のない、《清爛高校の美しき狂犬》だなんて呼ばれちゃっててさ。そんなだから、話した

のも今日が初めてだったりして、親しい間柄ってわけじゃないんだけどさ。でも、同じ学校に通っているんです。同じ教室で授業を受けているクラスメイトなんです。そんなこと、やっぱ、できない」
僕は、思い出していた。
儚げで、寂しげで、今にも消えてしまいそうな、彼女の姿を・・・・・・。
「なに、語ってんのよ。まったく、しょうがない子ね」
智代さんは、ふっと、顔を緩ませると立ち上がり、僕の肩を抱いた。そのまま、片手で僕の頭をクシャクシャに撫で繰り回す。びっくりして離れようとした僕を逃がさないように抱く腕に力が篭るのを感じた。
「秋兎！！」
「はい！！」
「約束なさい」
「はい？」
「危ないと思ったら、迷わず力を使うこと。
そのままの状態じゃ、あなたは普通の人間と変わらないんだから」
智代さんはじっと僕の顔を見る。僕も智代さんの眼を反らさず、見返した。
しばらくして、なにか納得したのか、智代さんのほうから離れた。
「それじゃ、私は寝るわ」
「うん。智代さん、おやすみなさい」
「おやすみ、秋兎」
そう、言葉を交わすと、智代さんは自室へと入っていった。その姿を見送ったあと、僕はテーブルの上に視線を落とす。
明日のことを考えると気が気ではないが、その前にやることがある。
僕は空いた缶ビールを一つ、拾い上げた。
智代さんは、食後の後片付けもしないのだ。

物質支配する少女　？

「ねぇ、神塚くん」
次の日の放課後である。
舞原とは今朝、教室で顔を合わせていた。
一瞬、彼女は僕を見て驚いた表情を見せた。が、それっきり。
授業中はもちろん、休み時間になっても舞原に動きは何も無かった。
彼女はいつもどおり、教室の片隅で一人、本を読み――――。
僕は窓越しに、外を賑わす喧騒を眺めることに終始した。
そのまま、本日最後の授業もつつがなく終わり、皆が帰り支度を始めてやにわにざわめきたつ。
自分から舞原に話しかける必要はないかと、教室を出ようとした僕だったのだが、そこでとうとう彼女は動いた。僕の前に立ち塞がり、名指しで呼び止める。そして、彼女の次の言葉に僕は耳を疑った。
「一緒に帰りましょう」
「・・・・・・・・・・・・・へっ？」
さっきまで騒々しかった二年Ａ組の教室が一瞬にして静まり返った。
事件発生である。
相手が男ならば、身体目当てだろうと淡い恋心を抱いていようと、そんなものは関係なく、平等に、公平に、時には言葉で、時には拳で、気安く近付くものなら、たちまちのうちに打ちのめし、打ち負かし、打ち滅ぼす。《清爛高校の美しき狂犬》。
そんな筋金入りの男嫌いで有名な舞原彩音が、自ら進んで男に近付き、なおかつ、「一緒に帰ろう」などと誘っているのだ。
教室にいる誰しもが「信じられない」と、驚愕の表情を浮かべていた。

これを事件と言わずして、なんと呼ぶ。
第三者からしてみれば、これほどおもしろい展開はないだろうが、残念、当事者の僕は苦笑いを浮かべるのみだ。
覚悟してきたとはいえ、まさか、こんな大多数の生徒がいる中で行動に移してくるなんて、思いもしなかった。この娘は自分が注目されている存在だという自覚がないのではないか。
周りからの視線が、すごい。見られることになれていない僕としてはこの状況、居心地が悪いなんてものではない。
「ねぇ、いいよね？」
そんな僕とは裏腹に舞原は人からの視線に慣れているのか、気にすることなく、何も応えない僕を見かねてか、再度、誘ってきた。滅多に見られない笑顔付きだ。「舞原が笑ったぞ！」「まさか、男の前で笑うなんて！！」「あぁ、俺の青春は終わった」などと、野次馬生徒たちが好き勝手なことを言っている。それだけ、舞原が男に笑顔を向けることは稀だった。無いに等しい。舞原彩音は美人である。昨日のことが無ければ、彼女の笑顔を素直に可愛いと思えたのだろうが、残念ながら、僕の身体は恐怖に震えていた。
ぁあ、悪魔の笑みだ。こえぇ・・・・・・。
とにかく、ここでこうしていては違う方面で状況は悪くなっていくだけな気がする。
「わ、わかった。いこうっ」
僕は慌てて、教室を出た。
舞原も後に続いて、教室を出る、その直後。
教室がさきほどとは違う意味合いの喧騒に包まれるのがわかった。

学校を出て、しばらく。
舞原と隣り合って二人並んで、帰路を歩く。
「あぁ～、不幸だ」
今日を乗り切っても、明日は明日で、どんな災厄が頭上に降りかかってくるのか、考えただけで憂鬱だ。

「普通に誘ったはずなのに、なぜ、あそこまでの騒ぎになってしまったのかしら？わたしに落ち度はないはず・・・・・・」
などと、隣の舞原さんは悩ましげに唸っている。どうやら、この女には自分自身を見つめ直す時間が必要なようだ。
しかし、さっきから、なんというか・・・・・・。
先にも述べたが、舞原彩音は美人である。それは僕だけの見解ではないらしく、さっきから擦れ違う男達の視線が舞原に集中しているのがわかる。
なんか、こういうの・・・・・・悪くないな。
・・・・・・・・・って、優越感に浸ってる場合かよ。
「どうしたの？」
「ハハ、なんでもない」
訝しげに見てくる舞原に、僕は乾いた笑みを浮かべて、右手を振る。
舞原はそれだけで納得したのか、「そお」と一言だけ返して、また、前を向いてしまった。
会話終了。
会話になってない。
僕としても、昨日の舞原を思い出せば、楽しい会話なんて、できる心境ではない。
こいつのことだ。いつ、どんな恐ろしい手段に打って出るかわかったもんじゃない。
石、砂利、自動販売機、車、壁、窓ガラス、木、鉄柱、等々・・・・・・・・。彼女にとって、周りにある、あらゆる物質は武器であり、凶器になり得る。名前を挙げれば、きりがない。
今さら、気付いたが・・・・・・。
３６０度、凶器だらけじゃねえかっっっ！！！！
涼しげな表情の舞原と、あたりをきょろきょろと落ち着きなく視線を這わせる不振人物となった僕は、お互いに一言も喋らないまま、ただ黙々と、帰路を歩き続けた。

いったい、どこまで歩き続けるのか。
まさか、本当にこのまま一緒に帰って終わるわけがないだろ。
どこか、人目のつかない場所に出たところで次の行動に出てくるのが妥当なところか。
周囲への警戒は怠らずに考えをまとめていく。
そうして、歩いているとT字路に行き当たった。
二人、立ち止まって、顔を見合わせる。
「僕、こっちなんだけど」
「わたしはこっちよ」
二人、指し示した指先は、まるで写し鏡のように真逆だった。
さて、どうする。
僕は黙って、舞原の様子を見る。
すると舞原は僕に背を向けて、
「それじゃ」
僕を置いて、帰りの道を歩き出した。すたすたと。
これは、う～ん・・・・・。
「予想外だっ！」
僕のツッコミを完璧に無視して、歩く。歩く。歩く舞原。
一人で大声出したみたいで恥ずかしい。
「って、ちょっと、待てよ！　舞原っ」
どういう意図があるのか知らないが、本気で舞原はそのまま帰ってしまうつもりのようだ。
何もないことに越したことはないのだが、何もなさすぎて、逆に不安になってしまう。自分の小者っぷりに悪癖する。
僕は急いで舞原を追いかけた。
「舞原っ！待てって」
そんなに離れていたわけではないから、すぐに追いついた。
追いかけてきた僕に気付いた舞原は不思議そうな表情で僕を見る。
「なにかしら？」
やっと、反応を示してくれた。けど、歩みは止める気がないよう

なので仕方なく、僕も隣を歩く。
舞原が、また、僕を見る。
「家まで送ってくれるの？」
「違うだろ」
「なぁんだ。違うのか、残念」
否定に不満を返された。
意味がわからない。
残念て。
「お前、どういうつも――――」
ゲスッ！！
思いきり、鞄で叩かれた。
「いってぇだろ！！」
「お前呼ばわりするからよ」
叩かれた理由がお前呼ばわり。
鼻が痛い。
「悪かった。謝るよ。じゃあ、舞原」
「なに？」
「どういうつもりなんだ？」
「神塚くん。さっきから、あなたが何を聞きたいのか、まるで、わからないんだけど？」
なんだか、舞原がイライラしている。
お前呼ばわりがそんなに気に食わなかったのだろうか？
ん～。
「だから、えぇっと、昨日のことだよ。昨日、僕が見たことを忘れてもらいたいんじゃないのか？　それで話なり、なんなり、するつもりで誘ったんじゃないのかよ？」
それ以外に大嫌いな男である僕と一緒に帰る理由はないはずなのだ。
こんなの、説明するまでもない話だと思っていたのだが。
「そんなことか。もう、結論は出たからいいのよ」

「は？　結論て、どういうことだ」
「実力行使であなたに忘れさせるのはやめた、ということよ」
「あ～、そういうこと。それはこちらとしてもありがたいことだな」
・・・・・・けど。
それはいったい、どういう風の吹き回しだ。
昨日、僕の記憶を抹消しようと、あんだけ、暴れた舞原が――――。
今日になって、なんとも消極的だ。
「納得できない？」
僕の気持ちを察したみたいに、舞原が聞いてきた。
納得できない。
「だって、昨日はあんなだったからさ。今日も襲われるかもって。結構、覚悟して学校きてたんだぜ」
「なによそれ。それを言うなら――――――」
「え？」
「いえ、なんでもないわ。それより、そうね。わかったわ。神塚くんがそんなにわたしとお話したいと言うのなら、少しくらいなら、付き合ってあげることにするわ」
行きましょう。と、なぜか、ご満悦な様子で先を行く舞原。
どうやら、話し合いで今日は済みそうである。よかった。
いつの間にやら、僕が舞原と話したがってるみたいになってるが、気にせずにいこう。

物質支配する少女　？

僕達は再び隣り合って、帰宅路を歩いていた。
実力行使はないと聞いてからというもの、僕の気も楽なものだ。
「そろそろ、わたしの家よ」
「へぇ。そうなんだ」
あたりを見てみる。
舞原の住んでいる家か。こういう娘が育つ家ってのは、ちょっと、興味がある。
この時間だと、舞原の両親は家に帰っているのだろうか。
優等生の親ってのは、やっぱり、厳しかったりするのだろうか。
「なぁ、舞原の両親はもう家に帰ってるのか？」
家にいるとしたら、このまま僕が行って、変な誤解をされるのも困るだろう。
そんなことを思って、聞いたのだが。
「親はいないわ」
どうやら、そんな心配は必要なかったようだ。
「母は小さいときに家を出ていったっきり、行方知れず。その後、父も精神を病んで、実家で祖父母と一緒に暮らしているわ。だから、――――いない」
「えっと。・・・・・・ごめん」
聞いてはいけないことを聞いてしまったようだ。
若干、空気が重くなってしまった。
「気にしなくていいわ」
舞原から、そう言ってくれた。
気を使わせてしまったかもしれない。
「大丈夫よ。妹と一緒だから、寂しくない」
「そっか。へぇ、舞原に妹がいるなんて、知らなかったよ。ってことは、今は妹と二人暮らしかぁ。妹さんは何歳なんだ？」

「中学二年生よ。清爛中学に通ってるわ」
「あー！　隣の中学校じゃん。もしかしたら、登校中か下校中に見てるかもしれないな」
「そうね。私に似て、可愛いわよ」
「へえ・・・・・・」
こいつ、妹を褒めつつ、自分を持ち上げやがった。抜け目のない奴だ。
しっかし、舞原の妹かぁ。
「楽しみだな」
「神塚くん、いやらしいわ」
軽蔑した視線を向けられた。
「ちょっと待てっ！！決して、そういうつもりはないぞ！！」
「なら、どういうつもりで言ったのかしら。汚らわしいわ」
「言葉がより酷くなった！？」
「安心なさい。あなたを家に上げるつもりはないわ」
「その安心は僕に対してじゃないよねっ！？」
家に上げてもらえないらしい。残念だ。
そういや、今までの道程で舞原の家に上がるなんて話は一度も出てなかった。
舞原の家のほうに向かってたから、てっきり、そういうことなんだろうかなぁと思ってたのだが、完全な早とちりだったらしい。
けど、そう思ってしまったって、仕方ないよな？
「それに、私の家はもう通り越しているわよ」
「なんだってっっ！？」
驚いて、オーバーアクションぎみに後ろを振り返る、僕。
ここは住宅街である。数多くある家のどれが舞原の家なのか、んむむっ。見える範囲にすら、ないかもしれない。
こいつ、家に上げないどころか、家の場所すら、教える気はないらしい。
どこまで、信用がないんだ。僕って・・・・・・。いや、舞原の

場合は僕個人に対してだけではないか。
男嫌い。極度の。
普通に隣を並んで歩けてるだけで奇跡と言ってもいい。
「じゃあ、いったい、どこで話をするんだ？」
話す内容が内容である。できるだけ、人気のないところがいいのは舞原もわかっているはずだ。対して、舞原はフフンッと鼻を鳴らした。
「ここよ」
「ここって・・・・・・・・・」
目の前には丘。そして、丘の上まで続く階段があった。
舞原は迷うことなく、その階段を登っていく。
「上には何があるんだ？」
舞原の後に続いて、階段を登りながら、僕は当然の疑問を口にした。
「別にたいしたところではないわ。公園があるだけよ」
「あ～。公園ね」
「私はこの公園を《丘の上公園》と呼んでいるわ」
得意満面に言う、舞原。
丘の上にある公園。
だから、丘の上公園。
まんま、である。
階段を登りきり、入り口にプレートが取り付けられていた。何気なしにそのプレートを見てみれば、そこにはしっかりと《丘の上公園》という名が明記されていた。
「本当にそのまんまの名前かよ！！」
本当にそういう名前の公園だった。
なんのひねりもない。
しかし、公共施設の名前なんて、どこもそんなものなのかもしれない。
舞原が数あるうちのひとつのベンチに腰掛けるのを見て、僕もそ

の隣に座ることにする。
「ふぅ。やっと落ち着けるのかよ」
「えぇ。喉が渇いたわね」
「んー。そういや、階段上る前に自販機あったな」
「わたし、喉が渇いたわ」
・・・・・・・・・・。
これは暗に、僕に飲み物を買ってこいと言ってきてる気がする。
けど、また、あの階段を上り下りするのか。それは、嫌だ・・・・・・・。
「・・・・・・・・・・買ってくれれば？っいっっって！！　なんか、ものすごい勢いで何かが頭に当たったっ！？」
「それは石よ。石が当たったの。神塚くんて相当、頭が悪い」
「運が悪いだろっ！！　酷い言い間違いをするなよ・・・って、僕は運も悪くないっっ！！　今のは舞原がやったんだろ！？」
「なによ。私のせいにする気？　酷い。濡れ衣よ。うっうっうっ」
顔を隠して、泣き出す舞原。
声の調子が全く、変わってないが。
平坦で抑揚のない。わざとらしさ、百パーセント。
「そんなことより、早く、飲み物を買ってきて」
「泣き真似するんだったら、せめて最後までやってくれませんかねっ！？」
「ギャーギャー、うるさいわね。また、石を頭に当てるわよ！」
もう、隠す気も無いのかい・・・・・・。
「はいはい。行ってくればいいんだろ」
「はいは三回」
「はいはいはい。行ってきまぁ～す。って、なんだか、リズミカルになっちまった！？」
はやくいけ。と、手で追い払われた。
さっきからこいつは・・・・・・ひどい。
渋々、階段を下りて、自販機の前へ。

来たはいいが、舞原が何を飲みたいのか聞いてなかった。
「まぁ、これでいいか」
ペットボトルに入ったミネラルウォーターを自分の分も含めて、二本購入すると、僕は再び、階段を登った。
公園に着くと、ベンチに座っている舞原に視線がいく。
教室の片隅で一人、本を読んでいるときのように彼女は涼しげな表情で、じっと前を見ていた。彼女の視線をなぞるようにその先に目を遣れば、青い空とわが町、そして、遠くには海と山。
「すっげぇな！」
舞原は僕の簡単の声に顔を向け、また、前の景色に向き直る。
「えぇ。私のお気に入りなの。もう少し日が傾けば、夕焼けに染まってもっと綺麗よ」
「へぇ。それは是非とも見てみたいものだ」
視線は目の前の大パノラマに向けたまま、彼女の隣へと腰を落ち着かせた。
「それで・・・・・・」
舞原の視線は目の前の景色から僕の手にする、二本のペットボトルに注がれる。
「・・・・・・水ね」
「・・・・・・水だな」
その水の入ったペットボトルをひとつ、手渡す。
舞原は渡されたペットボトルを両手で持ち、それをじっと見つめる。
「紅茶が飲みたかったわ」
僕のチョイスが不満らしい。
「文句言うなよ。仕方ないだろ？　何がいいかわからなかったんだから。当たり障りのないところで水にしたんだ」
「ふぅ・・・・・・。これだから、モテない男を相手にするのは疲れるわ」
「なっっっ！！水を選んだくらいでモテないなんてわかるのかよ！

？」
「そんなの常識よ。世界共通よ」
「世界共通ではないだろ」
「ふーん。つまり、神塚くんは自分は女の子にモテモテだとでも言うのかしら」
「・・・・・・いや、・・・・・・モテたことはないけど」
「フッ」
勝ち誇った顔をしやがった。
「舞原って、そういう女なのな！」
「そういう女って、どういう女なのかしら？」
嫌な女だって意味だ。言えないけど。
「そこまで言うなら、自分で買ってくればいいだろ」
「いいえ。せっかく買ってきてもらったのだもの。いただくわ」
「そうかよ」
ふて腐れ気味に返して、ちらりと彼女を見た。
「ありがとう」
感謝の言葉とともに微笑む舞原とバッチリ目が合う。
「・・・・・・そうかよ」
ぎこちなく、彼女から視線を外した。
・・・・・・・・・嫌な女だ。

物質支配する少女　？

「ねぇ、神塚くん。おもしろいものを見せてあげる」
そう言って、舞原はペットボトルのキャップを外した。
何事かと見ていると、突然、ペットボトルの飲み口から水が噴き出した。噴き出した水は地面に落ちることなく、空中で徐々に形を形成していく。それは、蝶のような羽を羽ばたかせて、空を飛びまわった。
「すごいでしょ？」
舞原が得意げに言う。
すごい。なんてものではない。
「まさか、固体だけでなく、液体も操れるのか」
「目に見える物なら、それが固体だろうと液体だろうとなんだって操れるわ。とくに液体は形が定まっていないから、好きな形にできて楽しいのよ」
水の蝶が地面に降り立つ。パシャッと音を立てて、水溜りを作った。
「私は、――――」
舞原は、その水溜りを眺めながら、話し始めた。
「私は、今の生活が、とても気に入っている。学校に行って、授業を受けて、休み時間には本を読む。家に帰れば、大切な妹が笑顔で待っていて、一緒にご飯を食べながら、妹の話を聞く」
静かに、けど、よく通る声で舞原は話を続ける。涼しげに、さっきまでとまるで変わらない表情で。
だが、今は彼女の瞳の奥に力が篭っているのを感じた。
彼女にとって、今の生活はなにものにも変えがたい大切なものなのだろう。
「私は昨日、生理だったの」
「はひっ！？」

いきなり、この女は何をっ！？？
年頃の女の子が恥ずかしげもなく、そういう言葉を男にするのはどうかと思うし、僕としてもあまり、聞きたくない！！
「あっ、ごめんなさい。女の子の日だったの」
今さら、オブラートに包んでも包み隠しきれねえよっ。
「それで、イライラしてたから、人の寄り付かないあの廃ビルで能力を使って発散してたの。でもそこに、――――」
舞原が、僕を見た。
「神塚くん。あなたが現れたわ。あなたに見られてしまった。誰にも言えない、妹にさえ、打ち明けていない、私だけの秘密を・・・・・・」
舞原の口が止まる。
あれだけの力だ。
おおやけになれば、どうなるか。
少なくとも、舞原が大切にしている日常は跡形も無く、壊れてしまうだろう。
「ごめん」
「あなたが謝ることではないわ」
「・・・まぁ、そうなんだろうけど」
「もし、あなたが私の秘密を誰かに話そうとしたときにはそれを阻止する為に相応の準備はしたわ」
「準備？」
舞原はポケットから鉄製の玉を取り出した。大きさからして、パチンコの玉のような。
「私が本気を出せば、岩をも、貫く」
「死ぬわっっ！！」
今日一日、僕の命は危険信号出っ放しだったらしい。
舞原の力なら手を使わずにどの角度からも標的を狙い撃ちできる。もし、凶器であるパチンコ玉を警察が回収しても指紋は残っていない。初めから、付いていないんだから。彼女は警察に捕まる心配が

ない。なんという大胆な完全犯罪。
今さらながら、恐ろしい！
「神塚くん？　そんなに遠くに離れちゃって、どうしたの」
「いえ。なんでもないです」
さらに今さらながら、舞原から距離を取っても仕方がないことに気が付いたのでベンチに座り直す。
「ここに来る前にも言ったけど実力行使はしないわよ。もう、神塚くんに無理に忘れてもらおうとはしないわ」
クスクスと、舞原は笑った。
「昨日、逃げられたときはどうしたものかと思ったけど、まさか、普通に学校に来るなんて、びっくりよ。神塚くんったら、まったくもって、いつもどおりなんだもの。拍子抜けしちゃったわ」
「何度も言うけど、これでも相当、覚悟を持って学校に行ったんだぞ」
「それは、私と一戦、交える覚悟かしら」
楽しげに、うすい笑みを浮かべる彼女を、一瞥する。
「最悪、それもな」
「そう。そうね。あなたにはそれを言える資格も、力もあるわ」
僕の力。怪異の血。
舞原が、僕の髪に触れた。
「普段は、黒髪なのね」
「・・・・・・あぁ」
「今からなって。　て、言ったら、なれる？」
彼女の問いかけに、僕は言葉を紡ぐより、その姿でもって、答えた。
黒髪は銀色に輝く白髪へ――――。黒眼は血のように真っ赤な赤眼へ――――。
「白髪、赤眼の・・・・・・」
――闇夜に浮き出る白い髪

血に染まったような赤き両の眼
白髪赤眼は闇に浮かび
血を求めて　夜空を駆ける――

この町に住む者なら、誰もが知っている都市伝説。
この町に生きる怪人伝説。
この僕に付けられたもう一つの名前《白髪赤眼の怪人》。
「それが、あなたの誰にも言えない、あなただけの秘密」
彼女が、僕の頭から手を離した。
拒絶。そう、僕は思った。
こういうことは前にもあった。どんなに優しい人でもこの姿を見たとたん、恐怖に顔を引きつらせて逃げ出してしまう。僕は普通ではない、化け物なのだ。
今までに僕のこの姿を見た者がしたように、彼女もまた・・・・・・。
「怖いよな・・・・・・」
期待してなかったと言えば嘘だろう。やはり、期待してしまっていたのだ。彼女が他の人にない大きな力を持っていると知って、もしかしたら、受け入れてくれるのではないか。なんて、都合の良い考えだろう。彼女が他の人にない大きな力を持っているからといって、中身は普通の人間なのだ。
自分と違うものを見れば、怖がるに決まっている。
「そうね。正直、怖いわ。けど――――」
けど。
違った。
彼女は怯えてなど、いなかった。
一度も視線を逸らさずに、しっかりと僕を見据えていた。
「けど、それ以上に私はこう思ってしまったわ――――綺麗だって」
さっきと変わらぬ涼しげな表情。
「綺麗、か。そっか」

何を言ってんだ、こいつは。まったく・・・何を言ってんだよ・・・・・。
僕は視線を目の前の景色へと移した。
そろそろ、太陽は朱色に染まり始めていた。
「誓うわ」
舞原は言った。
「私はあなたの秘密を守る」
夕日が世界を赤く染めていく。
「なら、僕はきみの秘密を守るよ」
舞原の言ったとおりだと思った。目の前に広がる光景はしばらくの間、僕の意識を奪った。
舞原が左手を僕にむけて、差し出す。
その手を僕は握り返した。
彼女の手は僕の手より小さくて、ほんの少し力を込めるだけで潰れてしまいそうだったけれど、どこか安心感を与えてくれる、そんな力強さを秘めていた。
「そうそう、この前、おもしろいテレビ番組を見たわ。人間ビックリショーという番組なんだけれど、神塚くん、出てみる気はない？」
「さっそく、秘密をバラそうとするなっ！！」
前言撤回だ。まったく、安心できねえよっ！！

物質支配する少女　？

暗くなる前に帰ろうと、僕達は公園を後にし、階段を下りた。
「漫画やアニメみたいに呪文とかあればもっとウケるのに。つまらないわ」
「んなこと言われてもな。ウケ狙いで変身してるわけじゃないし」
髪と目の色はもとの黒色に戻していた。最近は髪を染めてる人も多いが、さすがに白髪の高校生というのは目立ってしまう。
「なんつーか、スイッチをオン、オフに切り替える感じだよ。部屋の電気を付けるみたいに」
「簡単なのね」
「まぁ、今はね。昔は感情の起伏でころころ変わっちゃってたから、大変だったよ」
「そう。そのあたりは私と似てるわね」
「へぇ。お前もそうだったのか」
・・・・・・！
「突然、頭を抱えてしゃがみ込んじゃって、神塚くんはなにか悩み事かしら？」
「いえ。なんでもないです」
ちょっと神経質になりすぎなのかな・・・。
住宅街を少し歩く。と、舞原は立ち止まった。
「私、こっちだから」
左手に現れた道を指差して言う。
「あぁ、家まで送るよ」
「いやよ。危険人物に家を知られるわけにはいかないわ」
「おい、誰が危険人物だっ」
「えっ。まさか、自覚していなかったの！？　無自覚であんなことをっ！　あの子もかわいそう・・・・・・」
「待て待て待て！！無自覚にだって、なにもしてないはずだっ！」

あの子って誰のことだよ。心当たりは・・・・・・ないない！！
もう一度、送ると言ったのだが、やはり、断られてしまった。まぁ、舞原なら暴漢が現れたとしても逆に暴漢が泣かされる展開になるか。一応、舞原が道の先に消えるまで見届けてから、僕も帰り道を歩き出した。
「にしても・・・・・」
と、携帯の着信音が鳴った。ポケットから携帯を取り出すと電話に出る。電話の相手は智代さんだ。
「智代さん、どうしました？」
『仕事よ』
智代さんは僕の問いに即決で答えた。
「内容は？」
『ニュースでやってた例の事件。覚えているわね？』
「えぇ、覚えてますけど・・・・・・まさか、僕達向けの事件、ですか？」
僕達向けの事件。
不可思議、奇怪、奇妙な事件。
たしか中学生の女の子ばかりを狙った犯行。異常な事件たと思うが、智代さんが気にするほどの事件ではなかったと思った。昨日の限りでは智代さん自体、気にしてる風ではなかったし。
『そういうわけではないんだけどね。ただ、いつも贔屓させてもらっている刑事さんから気になる話を聞いてね』
「気になる話、ですか」
『そう、目撃証言なんだけどね。これまでに起きた事件三件、どの現場でも目撃されてる男がいるの』
「どんな男なんですか？」
『金髪で、瞳の色が紫の男』
金髪で、瞳の色が紫・・・・・・。
「それは目立ちそうな顔ですねぇ」
もしかして、そいつが犯人か？

『でもそいつは犯人じゃないわよ』
「・・・・・・」
思ったことを言う前に否定される。
「ってことは、犯人は犯人で、もう特定されてるんですか？」
『えぇ。これはまだ表に出てない極秘情報なんだけど、犯人に繋がる決定的な証拠が見つかったらしいのよ。近々、警察が犯人逮捕に踏み出すわ。私が考えるに、犯人と金髪紫瞳の男はなにかしら繋がっていると思うわ。犯人を追えば、金髪紫瞳の男とも会える気がするの！　金髪で瞳が紫だなんて、なんだか、すごく興味沸いちゃうじゃない。警察が犯人捕まえる前に見つけ出してお話してみたいわぁ』
「犯人はどうします？」
『はんにぃ～ん？　どうでもいいわよ、そんなの。それより、金髪紫瞳の男よ！！』
どうやら、智代さんは金髪紫瞳の男以外は興味ないらしい。
「わかりました。時間なさそうなんで今から行動開始します」
『はぁ～い！　お願いねぇ～』
『ああ、それから秋兎』
話は終わり。と、電話を切ろうとしたところで智代さんに呼び止められた。
「なんですか？」
『クラスメイトとは仲直り出来た？』
仲直り。
「まぁ・・・・・・」
『そう！よかったわねっ』
「はい。じゃあ・・・」
今度こそ、通話を切る。
携帯を開いた状態で持ったまま、僕は前を見る。その先は誰もいない。夕暮れの薄暗くなった住宅街とそれに続いて商店街。さらにその向こうにはまだ人で賑わっているだろう巨大ショッピングモー

ルがある。
「さて、犯人はどこにいるのかな」
携帯が着信音を鳴らして、メールが来たことを告げた。

大型のショッピングモールが出来たのは今年になってすぐのことだった。地下一階から地上４階建て。内部はショッピング館・グルメ館・スポーツ館、映画館、四つの施設から構成される巨大スポット。田舎町に突如できたこの化け物じみた施設はこの町の住人だけでなく、県外からわざわざ来る人もいるほどの集客力を誇っていた。そういえば、来月には別館も出来るらしい。名前は忘れたが都会で話題のアクセサリーショップがオープンするとのことでクラスの女子達がその話で盛り上がっていたのを思い出した。
その巨大建造物の屋上から下界を見下ろす。力を解放し、人間離れした五感を使って、僕はショッピングモールから出てくる買い物客たちを見張っていた。
もう、すでに太陽は沈み、周囲は夜の闇に包まれているが、僕の目は遠く離れた出口から出てくる一人ひとりの顔をしっかりと把握していく。
犯人の狙いは中学生女子。もう、学校は下校時刻を過ぎていたので、ならばと、この町一番の人気スポットであるこのショッピングモールに来たのだが・・・・・・。
時間はすでに午後八時を過ぎている。もう、ほとんどの店が店じまいをする時刻だった。あと、やっているのはグルメ館に数店と映画館くらいだろうか。
さすがにもう、中学生女子が出歩く時間ではなかった。とくに今は中学生女子を標的としている連続殺人犯――たしか名前は山田啓太。メールで送られた顔写真と名前を思い出す。彼がこの町のどこかに潜んでいるわけだ。夜になっても外出してる子なんていたら、その子は死にたがりか大馬鹿野郎だろう。

こりゃ、出直すしかないか・・・・・・。そう思いつつも、帰る前に町内をぐるっと一周しようと考えて、動こうとしたときだった。
「あれ・・・・・・？」
見覚えある制服が目に留まった。
清爛高校の制服である。
そして、腰まで伸びた長い黒髪。
いまいち何を考えているのかわからない、涼しげな表情。
見られていることに気付かず、ショッピングモールの駐車場を横切るように走っているその少女は、一時間ほど前に丘の上の公園で語り合い、その後、家に帰ったはずのクラスメイト――――舞原彩音だった。
「向かってる先は・・・・・・別館か？」
制服をまだ着てるってことは、家に帰らなかったのだろうか。
しかし、別館はまだオープン前で何もない。こんな時間に行っても人だっていないはずだ。いや・・・誰もいないほうが彼女には都合がいいのか。昨日してたように力を使ってストレスでも発散するつもりなのかもしれない。
あんなに急いで――――。あいつなら、殺人鬼と出くわしても返り討ちにしちまうかもな。けど、こんな時間に出歩いてたら、妹に心配かけるんじゃねえのか？　まったく、・・・いや・・・・・・イモウト・・・・・・
「――――くそっ」
僕は舞原を追うように屋上を駆け出した。
「被害にあった女の子達はみんな、中学生の女の子なの」
智代さんの声が脳裏に蘇える。
「今は妹と二人暮らしってことか。何歳なんだ？」
僕はたしかに聞いていた。

「中学二年生」
「私に似て、可愛いわよ」
「学校に行って、授業を受けて、休み時間には静かに本を読んで。家に帰れば、大切な妹が笑顔で待っている」
舞原の言葉が次々とあふれ出す。

「私は、今の生活が、とても気に入っている」

だから、彼女は走っていた。
今の生活を失わないために、守るために、走っていた。
舞原には確信があるのだろう。その走りに迷いがない。視線は常に別館を見ている。
きっと、いるのだ。舞原妹が。そして、最悪なことに、中学生女子連続殺人犯も。
読みは当たっていたのに、なぜ、気付かなかった。
来るのが遅かったのか。いや、そんなことは今となってはどうにもならないだろ。兎にも角にも、急がないと本当に取り返しが付かなくなってしまう。
ショッピングモール本館から別館の屋上へと跳ぶ。
舞原は一足先に別館の中へと入っていった。すんなり入っていったところを見ると一階の入り口は鍵が掛かっていなかったようだ。こっちは屋上からの入り口にしっかりと鍵がかかっていたので蹴破って僕も館内へと入った。音を立ててしまったが、今回はこのほうが都合がよさそうだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8573v/

白髪赤眼の怪人

2011年9月10日03時12分発行